

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04525

研究課題名(和文) 専門職としての学習共同体を活性化・発展させる実践的研究リーダーの育成に関する考察

研究課題名(英文) Consideration on training practical research leaders who activate and develop learning communities as professionals

研究代表者

田仲 誠祐 (Tanaka, Seiyuu)

秋田大学・教育学研究科・教授

研究者番号：50760881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：校内研修で教員が求める「深い学び」について調査し、Kolbの経験学習サイクルモデルに位置付けて考察し、内容・理解、プロセス・思考、実践への意欲化の3つのカテゴリーを見いだした。この結果を踏まえ、効果的な研修会の実施と、ミドルリーダーの育成を目指し、授業研究会終了後に少人数で研修自体を省察する「研修改善リフレクション」を考案・試行し、ミドル層教員の研修改善への参画意識の向上といった面で成果を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

具体的経験 - 内省的概念化 - 抽象的概念化 - 能動的実験のサイクルによるKolbの学習モデルは、経験を一過性のものに終わらせず、得られた知見を応用することを容易にするもので、教師の授業力向上の基本的なモデルとして引用されてきた。今回、考案した「研修改善リフレクション」は、研究協議自体を対象として省察することでダブルループ思考を可能にし、授業改善にとどまらず校内研修の改善、さらには研究推進の中核となる人材の育成において新たな切り口・方法を提案するものである。

研究成果の概要(英文)：I researched the "deep learning" that teachers want in school training, positioned it in Kolb's experiential learning cycle model, and found three categories: content/understanding, process/thinking, and motivation to practice. Based on this result, we devised and tried "Reflection on improving workshops" in which a small number of people reflect on the training itself after the lesson study session, with the aim of conducting effective training sessions and developing middle leaders. We were able to obtain results in terms of raising awareness of participation in improvement.

研究分野：教育学

キーワード：校内研修 研究リーダー

1. 研究開始当初の背景

授業研究，プロフェッショナルラーニングコミュニティへの関心の高まり

TIMSS 3 のビデオスタディ以後，諸外国において日本式の授業研究への関心が高まり，授業研究の方法，共同研究システム，プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ（以下 PLC と記す）等の研究が増加している。授業研究を効果的に行う方策として，姫野(2011)は，建設的意見が出る雰囲気づくりと授業観察の視点，木原(2011)は，学校の PLC として成長と授業研究を発展させるための装置の必要性を述べている。PCL について，木原ら(2015)は，発展要因の構造に関して 5 要因 4 層構造モデルを提案し，その基盤的要因として，「研究推進文化の存在」，「管理職のリーダーシップ」，「実践的リーダーの活躍」を位置付けている。千々布(2014)は，比較文化的な視点で日本的 PCL の特性についてまとめ，秋田県を例に挙げ，学校を超えて全県レベルで PCL が成立していることを報告している。また，近年，学校組織マネジメント，リーダー論の知見から，ミドルアップダウン・マネジメントが重視されてきている。

(2) これまでの研究活動を踏まえ，この研究構想に至った背景と経緯

研究代表者は，中学校の研究主任や秋田県教育委員会の指導主事として，授業改善，効果的な校内研修の在り方等に取り組み，中学校長として教員の資質向上に携わってきた。その後，教職大学院の実務家教員となり，秋田県の授業，共同研究システムの特質についての研究，中核教員を育成のためのカリキュラム開発に携わる中で，次の 3 点について課題意識をもつようになった。

- ・ 授業研究，校内研修に関する知見が学校や行政で十分に活用されていない。
- ・ 研修推進の中核となる実践的研究リーダーの機能に関する研究が不十分である。
- ・ 校内研修を「深い学び」の場とする契機に関する研究が必要である。

これらの課題意識を共有する研究者教員および実務家教員とで，教職大学院のカリキュラム改善に生かすことを目指し本研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究は，チーム学校を効果的に機能させる一方策として，校内研修に焦点を当てたものである。教員自身が「主体的・対話的で深い学び」を実現するために，教員は研修会においていかなる学びを求めているのか，その充実の鍵となる実践的研究や研修をリードする教員が校内においていかなる役割を果たしているのか，研修会充実の効果的方策について考察し，その成果をもとに実践的研究リーダーの育成や効果的な校内の研修会の実施に資することを目指す。

具体的には，

【A】校内研修会において教師が求める「深い学び」の様相を明らかにする。

【B】実践的研究リーダーの育成において効果が見込まれる，研修改善リフレクションを実施し，その効果を検証する。（授業研究が，授業を対象とした省察であるのに対し，研修改善リフレクションでは，授業研究会における協議や教員自身の学びを対象化して省察する）

【C】実践的研究リーダーを育成するため，研修改善リフレクションを取り入れたカリキュラム開発を行う。

3. 研究の方法

【A】深い学びの様相に関する研究

- (ア) 「深い学び」の特性...アンケート調査(テキストマイニング)，聞き取り調査(質的分析)
- (イ) 教員の深い学びの契機の調査...授業研究会を VTR に記録し質的に分析
- (ウ) 効果的なリフレクションの視点...算数・数学科，総合的な学習の時間で関連研究

【B】ミドルリーダーを育てる研修改善リフレクション

(ア) 研修改善リフレクションの Protokol 分析

(イ) 研修改善リフレクションを継続的に実施した教職員への聞き取り調査

【C】カリキュラム開発

教職大学院において、研修改善リフレクションを導入した授業の実施

4. 研究成果

(1) 教員にとっての深い学び

校内研修会において教員が求める深い学びの様相を明らかにするために、秋田県の小学校、中学校の教員が校内研修で実感した「深い学び」について質問紙調査を行った。テキストマイニング分析から、category P（「気づく」、「学ぶ」を核とする「学びの内容・理解」に関わるカテゴリー）、category Q（「考える」を核とする「学びのプロセス・思考」に関わるカテゴリー）の2つを抽出した。また、発話内容の質的分析からは、大きく5つカテゴリー（13の小カテゴリー）に分類することができた。

categoryA ... a1: 考える過程, 学び方, a2: 批判的思考, a3: 再構成

categoryB ... b1: 省察を踏まえた改善, b2: 相互作用, b3: 日常の指導への活用

categoryC ... c1: 言語化・可視化, c2: 関連付け, c3: 知識の統合, c4: 改善の方向性

categoryD ... d1 新たな視点・理解, d2: 課題の発見

categoryE ... e1: 主体性, 情意

各カテゴリーを Kolb の経験学習サイクルモデルに位置付けて考察したところ、教員が求める深い学びとして、内容・理解、プロセス・思考という2つのカテゴリーに加えて、実践への意欲化という第三のカテゴリーがあることを見いだした。

(2) ミドルリーダーの育成と研修改善の取組

「研修改善リフレクション」の枠組み

校内研修を充実させるために近年では、ワークショップ型の協議が広く導入されるようになってきている。授業研究の活性化のためには、単に協議方法の改善を行うだけでなく、課題に焦点を当てたファシリテーション機能や協議内容の継続的な見直しが重要である。そうした研修を展開するためには、チームとして省察の在り方を検討するダブルループ思考が必要であると筆者らは仮説をたてた。その手立てとし、研修会の実施直後に、研究主任を中心に数名のミドルリーダーで、研修会の協議自体を対象として省察し、次回の研修会方向性を考えることを継続的に実施することとし、これを「研修改善リフレクション」と呼ぶこととした。

「研修改善リフレクション」では議論をできるだけ可視化・具体化するためにシートを用いて実施する。そのシートに、必須となる項目は「研修の深まりの分析」、「改善点の分析」、「教訓」である。

「研修の深まりの分析」においては、協議の中で「協議が深まったのはどの場面だったか」、「どのような内容だったか」、「どのような契機で深まったか」、プロセスを記述し分析する。研修全体として深まった場面と、個人的に「深まった」と感じられる場面についても記述する。「改善点の分析」においては、協議が十分に深まらなかった場面を取り上げ、その要因について探るとともに、改善のために考えられることについて記述する。これらの考察を踏まえ、「教訓」を明示化するようにする。

「研修改善リフレクション」の発話分析

秋田県中央管内の中学校で実施した研修改善リフレクションの発話を書き起こして分析した。

コーディネーターと3名の研究リーダーで15分間実施したものである。分析したプロトコルでは、内容として「授業を見る視点」、「協議の進め方」、「焦点化と構造化の方法」、「感想の羅列に終わらない協議」について約20分で議論が進み次回への具体的提案もされた。発言を分類すると、「a：協議会の表記」、「b：問題提起」、「c：推論」、「d：可能性」、「e：提案」、「f：その他」があり、往還しつつも概ねこのような順序性で進むケースが多かった。コーディネーターへの聞き取りから、短時間であっても研修の具体的改善に向けた話し合いができたのは、「適切な人数」、「意欲的な若手教員と研究リーダーの参加」、「率直に語り合う組織文化」が大きな要因であることが示唆された。

研修改善リフレクションの実践事例

(ア) 秋田県南管内のD中学校では、年間を通して、校内授業研究会後に研究主任を中心に4名の教諭で研修改善リフレクションを実施した。その結果、若手教員のアイデアの提案機会の創出と参画意識の向上、研究をチームとして進める体制の確立についての効果が認められた。課題は、時間の確保であるが、これについては人選と15分で終えることに心掛けることにより十分に継続可能のようであった。

(イ) 秋田県中央管内K小学校では、若手教員の急激な増加に伴い、メンター方式による人材育成を進め各世代の教員の力量向上を目指している。具体的には、テーマを設けて実施するメンタチーム研修、日常の課題や実践について実施するメンターペア研修の相互補完的な2種により進めている。これら2つのメンター方式研修で重視しているのが、2段階リフレクションである。その継続により、若手教員にとっては自己の成長を客観的に捉える機会となり得ること、ミドル・ベテラン教員にとっては、自己の役割についての自覚を高め、マネジメント意識の向上につながる事が、聞き取りや省察記録から窺えた。

(3) 関連する研究

若手教員の実態調査

若手教員の育成に資するため、採用1～3年目の教員の自己認識に関する調査を実施した。その結果、採用1年目に自己認識値が高低に変動するタイプは約4～5割、初任段階で困難と認識する期間が長期に及ぶタイプ(低安定型、下降型)が約1～2割、大きな危機を自覚することなく初任期を経過するタイプ(上安定型、中安定型、上昇型)は4割程度であった。また、小学校教員と中学校教員、講師経験の有・無で採用後の自己認識知の変化の傾向に違いが見られること等を明らかにした。

管理職着任前に必要となる資質能力

管理職着任前までに必要とされる資質能力をどのように捉える必要があるのか三県調査から考察し、管理職育成研修モデルを考察した。その結果、管理職として特に求められる資質能力については四割以上の教員が危機管理、人材育成力、判断力・決断力を共通して重視する項目として考えていることなどが明らかになった。これらの調査から管理職に特に求められる資質能力、管理職着任前までに身に付けさせたい資質能力、教員に共通に求められる資質能力として分類し、管理職着任前から着任後の各ステージにおいて必要となる資質能力として整理した。

数学科における省察

佐藤は、発展的思考・態度の育成のために「数学することを知る」が重要であるとし、教師の「数学することを知る」を捉える枠組みと質問紙調査を開発した。この枠組みを用いてケーススタディを行った結果、授業の構想時は、学習者の問題解決の自由性、発展性、個人的な探究促進、自己実現を重視するため、指導・支援の可変を重視する「可謬的可変的な見方・考え方」となる傾向が見られること、一方、授業実践時は、教師の計画した発展の指導、短期的な学力成果を重

視するため、学習者の思考・態度を制御できるよう、指導・支援を固定する「絶対的固定的な見方・考え方」となる傾向があることを見いだした。この研究で作成した「教材を知る」、「反応を知る」、「思考を知る」、「展開を知る」、「数学をすることを知らる」についての授業評価ルーブリックは、算数・数学で効果的なリフレクションを進めるための枠組みを提供しうる。

総合的な学習における省察

細川は、小学校の総合的な学習の時間の学習指導において、教師の指導性がどのような形で表れるかについて研究を行った。授業デザインから教師が想定していた仕掛け、自律的学習における教師の指導性についての考察を通して、子どもの自発的問題解決を促すような間接的な働きかけ、あえて「出る」ことなく「待つ」といった教授行動を確認した。このような教師の出方が、自律的な学習において重要な、子ども自身の学習過程における形成的省察を促すことにつながっていることを明らかにした。

(4) 本研究を踏まえた授業、研修会等の実施

本研究を踏まえ、次のよう取り組みを進めている。

教職大学院の「秋田型共同研究システム」の授業で、附属学校と連携し研修改善リフレクションを行うプログラムを導入したカリキュラムを開発した。

秋田県と連携し、中核となる教員の育成のため、教職大学院の資源を活用して「スクールリーダー研修」を毎年2日実施している。

(5) 本研究の成果と限界

本研究の実施期間内に、新型コロナウイルス感染性の流行があり、学校を訪問しての調査研究が十分であったとは言いがたい。研究協力校からは様々な効果の報告は受けているものの、今後、さらなる検証が必要と捉えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 細川 和仁	4. 巻 44
2. 論文標題 試論：ICT 活用による子どもの学びの展開と実践に対する教師のスタンス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 109-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田仲誠祐, 伊藤紘成	4. 巻 第43号
2. 論文標題 校内研修における教員の深い学びに関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 pp.127-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 細川和仁・菅野宣衛	4. 巻 第43号
2. 論文標題 総合的な学習の時間における教師の指導性の分析 - 子どもの「形成的」省察を促す教師の出方 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 pp.79-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 細川和仁	4. 巻 1
2. 論文標題 総合的な学習の時間における“形成的”省察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部附属小学校研究（WEB版）	6. 最初と最後の頁 p.1, p.4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田仲誠祐・佐藤 学・鎌田信・細川和仁・秋元卓也	4. 巻 第41号
2. 論文標題 教員育成指標に基づくアンケート調査による 小学校初任者教員に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 69 - 74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山大一郎*・田仲 誠祐	4. 巻 第41号
2. 論文標題 高校数学における秋田北高型の授業実践に関する研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 75-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浦野 弘*・佐藤 友菜	4. 巻 第41号
2. 論文標題 秋田大学教育文化学部附属小学校における「総合的な学習の時間」の開発研究の系譜	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 92-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤学, 田仲誠祐, 神居隆, 長瀬達也, 成田雅樹	4. 巻 第36集
2. 論文標題 学生の実践的課題を融合化、連続化するプロジェクト型模擬授業の試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育大学協会研究年報	6. 最初と最後の頁 249 ~ 258
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐藤 学
2. 発表標題 算数・数学における「自律的発展型授業」に関する質問紙調査の実施とその分析：秋田県小中高教員データから校種間の相違の分析
3. 学会等名 全国数学教育学会第55回研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤 学
2. 発表標題 算数・数学における「発展型授業」に関する調査の実施とその分析
3. 学会等名 あきた数学教育学会第4回定例研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤学・重松敬一・加藤久恵・新木伸次・黒田大樹
2. 発表標題 発展型授業分析における「数学することを学ぶ」の枠組みの開発とその試行
3. 学会等名 東北数学教育学会第26回初夏研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 細川 和仁
2. 発表標題 総合的な学習の時間の指導における「教師の出」 - 小学校6年生の授業の事例研究より -
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鎌田信, 田仲誠祐
2. 発表標題 教職大学院と教育委員会の連携による管理職育成とミドルリーダー育成支援プログラムの開発
3. 学会等名 日本教職大学院協会研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古内一樹・田仲誠祐
2. 発表標題 教育委員会との連携による授業の実践
3. 学会等名 全国教育系大学協議会研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田仲誠祐, 神居隆, 古内一樹, 廣嶋徹
2. 発表標題 「教員養成秋田モデル」の成果と課題
3. 学会等名 平成29年度日本教育大学協会研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤修司、田仲誠祐、神居隆、古内一樹、廣嶋徹、野坂奨
2. 発表標題 秋田型授業による実践知の継承・創造及び県境を越えた東北地区の協働を促す取組
3. 学会等名 平成29年度日本教職大学院協会研究大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 千々布敏弥、田仲誠祐、浦野弘、他23名	4. 発行年 2017年
2. 出版社 教育開発研究所	5. 総ページ数 209
3. 書名 若手教員がぐんぐん育つ 学力上位県のひみつ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	細川 和仁 (Hosokawa Kazuhito) (30335335)	秋田大学・教育文化学部・准教授 (11401)	
研究分担者	浦野 弘 (Urano Hiroshi) (50185089)	埼玉学園大学・人間学部・教授 (32421)	
研究分担者	佐藤 学 (Satou Manabu) (90587304)	秋田大学・教育文化学部・教授 (11401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------